

●●● 憲法記念行事「改憲…どうして?!」 憲法改正? 国民投票法案? 日本はどうか? 現行憲法の基本原理を確認, 改憲議論の問題点を検証

●開催と構成

5月27日、弁護士会館クレオで、日弁連と東京三会共催の第15回憲法記念行事「改憲…どうして?! (憲法改正? 国民投票法案? 日本はどうか?)」が開催された。

当日は、日弁連の平山正剛会長の挨拶に始まり、①NHKドラマ「憲法はまだか」の上映、②古関彰一獨協大学教授による基調講演、③パネルディスカッションの3部構成で行なわれた。

●NHKドラマ「憲法はまだか」

このドラマ自体は、第1部象徴天皇、第2部戦争放棄に分かれる長時間のものであるため、本記念行事では、後者の一部を上映した。場面は、GHQと幣原内閣との憲法改正にかかる葛藤の場面から、帝国議会でその審議入りするところまでである。

①GHQと幣原内閣が、対極東委員会との関係では、天皇制擁護で共闘しているようにみえること、②宮沢俊義の後の八月革命説に繋がるような発言の場面が出てきたり、③高野岩三郎や鈴木安蔵がGHQ案とかなり近い民間草案を起草していたことなど、興味深い場面の連続であり、かつ、憲法を改正することの重さについても考えさせる内容であった。

●基調講演

その要点は、次のとおり。

- (1) マッカーサーは天皇制維持の方針で、極東委員会と対立しており、平和憲法の中に天皇を位置付けることで、天皇への戦争責任追及をかわすために憲法の制定を急いでいた。そして、支配層も、天皇制維持のため、戦争放棄条項を受け入れた。
- (2) 9条2項のもと、自衛隊のイラク派遣といっても、非戦闘地域での人道復興支援までと抑制が効いているわけだが、この条項を外すとどうなるか?
- (3) アメリカもそうだが、戦争体制を市民生活に持ち込むと人権保障も劣化する。愛国者法をみよ。

●パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、憲法研究者・土井たか子氏が初めてというコーディネーターに挑戦し、聴衆をハラハラさせるスタートとなった。型破りのコーディネーターのもののパネルとなった(パネラーは、ピースボート共同代表・吉岡達也、評論家・佐高信、参議院議員・糸数慶子、古関彰一の4氏)が、その全てをここに記すことはできないので、印象に残った点を、私なりに要約して、幾つか指摘しておくことにする。

- (1) 9条は、発展した国のひとつのモデルである。これがなくなると、もうひとつのモデルは米国だが、これだけが発展した国のモデルになってしまう。
- (2) 外国を歩くときは、まる腰が安全である。これが、現実論であるということが、もっと認識されてよい。
- (3) 「西郷隆盛伝説」を執筆中であるが、西郷は、愛国者だと思うが、「靖国」には祭られていない。国を愛することと時の権力に愛国者と認められることとの違いをどう考えるか?
- (4) 憲法行脚の会で、野中広務、亀井静香らを巻き込んでやっている。いずれもイケメンではない。悪いことをするのは、イケメンである。
- (5) もともと改憲論者でも、今のなし崩し的な政治の軽さから、今は危ういという人が増えてきている。
- (6) 9条のポイントは、2項。1項だけなら、国連憲章にもある。2項の削除は、地の果てまでも米軍について行くということになりかねない。これが絶対無いと否定できる人がいるか?

●最後に

閉会の挨拶に立った東弁の憲法問題等特別委員会の堂野尚志委員長は、空襲で5歳の妹の手を引いて逃げた体験をもとに、昨今のイラク関連のTV映像に触れて、撃つ側の視線で見ている違和感がある、私は撃たれる側の視線で見たいので、涙なくして見るができないと話された。確かに、このように視線を変えてみることで、そのことの意味はとてつ大きいことに思われた。

(憲法問題等特別委員会事務局長 平出一栄)